

日本語訳聖書と英語訳聖書の文章の構造の違い

A Comparison of Sentence Structure in Japanese and English Bible Translations

マッキントッシュ・スティーブン

Stephen McIntosh

82-373 Structure of the Japanese Language

1. はじめに

聖書翻訳の比較を通して日本語と英語の文章の構造を分析するつもりだ。なぜなら、キリスト教徒の私にとって、聖書は大切なものだからだ。普通は翻訳と原文では、原文を正しいテキストとして扱う傾向がある。でも、聖書の元の言語は英語でもなく日本語でもないから、どちらも翻訳された。だから、客観的に分析しやすいのである。その上、聖書の翻訳は特別だ。翻訳者は慎重にゆっくり正確な翻訳を目指すからだ。そのため、聖書の翻訳は質が高い。対象資料として主に新改訳聖書（第3版）と新国際版聖書（第4版）を使う。日本のキリスト教会では新改訳聖書を使う人が多い。アメリカでは新国際版聖書が一番有名だ。比較を広げるため、最後の例としてスペイン語とポルトガル語の訳も調べる。

2. 日本語訳聖書と英語訳聖書の文章の構造はどう違うか

2.1. 文法に対する尊敬表現の影響、主述の構造と主題の文脈の構造

このセクションでは例を挙げて、日本語と西洋言語の表現法を比較する。

例1) ^{そうせい き}創世記6:5

主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのを <u>ご覧</u> になった。	The <u>LORD</u> <u>saw</u> how great the wickedness of the human race had become on the earth, and that every inclination of the thoughts of the human heart was only evil all the time.
--	--

翻訳には大きな違いがあるけど、ここではふたつの違いだけに焦点をあてる。最も明らかなのは尊敬を示す言葉だ。双方とも神様を指す言葉は大きく書いてある。英語では「LORD」で、日本語では「主」だ。しかし、似ているのはこれだけだ。日本語には決まった尊敬語がある。この文では「見る」の代わりに「ご覧になる」が使われている。英語にはそれに相当する敬語がない。誰に対しても同じ「saw」を使う。

例2) 詩篇 8:6

あなたの <u>御手の多くのわざ</u> を人に治めさ	You made them rulers over <u>the works of your</u>
-----------------------------	--

せ、万物を彼の足の下に置かれました。 (万物: 宇宙に在る、すべての物)	<u>hands</u> ; you <u>put</u> everything under their feet.
---	--

この節にも尊敬表現の違いが見える。でも、普通の尊敬語の代わり神様を尊敬するために受身形の「置かれました」が使われている。英語の文では「put」が使われているだけだ。それ以外、日本語では神様の手を表す言葉は「御手^{みて}」だ。「御」という接頭辞を名詞に付けることにより神様に対する敬意と、丁寧さを表わす。英語にも丁寧さを表す言葉遣いがある。「the works of your hands」という部分は、普通の人の行動について書く場合は「the things you made」になるだろう。

例3) 箴言^{しんげん}26:1

誉れが愚かなものにふさわしくないのは、 夏の雪、刈り入れ時の雨のようだ。	<u>Like</u> snow in summer or rain in harvest, <u>Honor</u> is not fitting for a fool.
---	---

日本語の翻訳では、ふさわしくない様子は話題である。夏の雪と刈り入れ時の雨に比べている。英語のでは普通の「Like～、～」の文法構造が使われている。日本語の文章では主語が変わる。最初の部分では「誉れ」だ。そのあと、主語がふさわしくない様子(話題)になる。英語の文章ではずっと「Honor」だ。

例4) マタイの福音書 5:29 (最初の文は文脈だ)

もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。 <u>体の一部</u> を失っても、 <u>体全体</u> ゲヘナに投げ込まれるよりは、 <u>よい</u> からです。	If your right eye causes you to stumble, gouge it out and throw it away. <u>It is better for you to lose one part of your body than for your whole body to go into hell.</u>
---	--

この一節は、スペイン語とポルトガル語の翻訳も面白い。

Por tanto, si tu ojo derecho te hace pecar, sácatelo y tíralo. <u>Más te vale perder una sola parte de tu cuerpo</u> , y no que <u>todo él</u> sea arrojado al infierno.	Se o seu olho direito o fizer pecar, arranque-o e lance-o fora. <u>É melhor perder uma parte do seu corpo do que ser todo ele lançado no inferno.</u>
--	---

英語、スペイン語、ポルトガル語の翻訳では「誰の体か」ということが直接書いてある(「your body」「tu cuerpo」「seu corpo」)。日本語では、文脈がその情報を伝える。ここまでは、西洋の言語はすべて同じである。しかし、「誰にとってよいのか?」という質問に答える方法が違う。英語では「for you」が書いてある。スペイン語では「te」という2人称間接目的格を通して同じ情報を伝える。日本語はポルトガル語と同じである。「あなた」あるいは「você」書かれていないが、読み手主語を知っているから必要ない。

2.2. 尊敬を示す方法、仕手と話題の特定方法

これらの例を見て、双方の違いが見える。1つ目は尊敬を表す方法の違いだ。英語では

表記と言葉遣いだけが変わる。例1の「LORD」や、例2の「works」などの言葉を使う。日本語にもこういう違いがある。例えば、表記で「主」は太字だ。でも、英語と違って日本語では尊敬の意味が文法に反映されている。名詞の前に「御」をつけることが多い。上の例2にあるが、聖書はこの尊敬表現に溢れている。たとえば、聖書で有名な祈りがある。

天にいます私たちの父よ。

御名があがめられますように。

御国が来ますように。

みこころが天で行われるように地でも行われますように。

マタイの福音書 6:9~10

これはその前半だ。それなのに、「御」がすでに3回出てくる。

名詞変更以外の尊敬表現もある。例えば、動詞には尊敬語と一般の動詞で、完全に異なるものがある。例1では「見る」が「ご覧になる」に変わる。他の節では「言う」が「仰せられる」また「おっしゃる」になる。しかし、翻訳者はこれらの尊敬語に満足していないので、尊敬の受身形も使う。例2の「置かれました」はこの文法構造を示す。この形を使って、どの文章でも神様に対して敬意を示すことができる。

もう一つの違いは仕手と話題の特定方法の違いだ。英語では主語がなければ文章が成り立たないので、主語が焦点を受ける。スペイン語とポルトガル語は英語より柔軟だ。例4のように主語を省略しても意味が伝わる。言語学ではこういう言語は「Null-subject language」と呼ばれている。主語の代わりに代名詞を省略できる言語だ。日本語はスペイン語やポルトガル語よりもさらに自由だ。ある情報が文脈に含まれていれば、省略可能だ。こういう言語は「Pro-drop language」と呼ばれている。主語だけではなく、なんでも省略できる言語だ。日本語の「は」という助詞はこのような言語にふさわしい。なぜなら、簡単に足りない文脈を補える方法だからだ。「が」と違って「は」は格助詞ではない。下に書いておいた例からこの事実が明らかだ。

1. 田中さんはお茶を飲みました。

2. お茶は田中さんが飲みました。

両方の文は同じ事実 (Tanaka drank tea) を表している。「お茶は」目的語で、「田中さん」は主語である。しかし、2では「は」は目的語「お茶」に付いている。このことから「は」は主語に付かない場合もあることがわかる。1は田中さんについて話そうとしているときに使い、2はお茶について話そうとしているときに使う。「は」は焦点を当てる助詞である。一番重要な名詞を指し示す助詞だ。だから、聞き手は「は」が指し示すトピックを使って文の意味を理解できるようになる。

2.3. 日英語の文化的見方の違い

言語の現象と文化を関連付けて考えるときは、注意が必要だ。推測しかない場合がある

からだ。尊敬語は日本人が尊敬を大事にする傾向から発展したのだろうか？それとも、その傾向が言語から生み出されているのだろうか？この質問には答えられない。言えるのはこの場合では、文化と言語が一致しているということだ。日本人は西洋人よりも地位と名誉を大切にする。主語と話題に関する文法と文化の繋がりは曖昧だ。日本人にとって周囲や自然な状況は大切なので、文法がこれを反映するのかもしれない。

3. おわりに

日本語の文章は主題の文脈で意味が出てくるが、英語では主語、目的語がいつも明らかに示されている。日本語では尊敬語を使って礼儀正しく話す。英語では明確な尊敬語を使わず、用語や言葉遣いを調節する。

日本語の「は」は主題を指し示す。英語の主語と違って、他の主題が示されるまで文の内容は主題を考えて、解釈する。主題が枠となりあとは中味である。この構造は話題化によって他の言語でも使われているが、日本語ではトピックが優勢だ。韓国語もそうだ。比較的度は低いがポルトガル語の親しい者同士の話し方にも話題優勢の構造を使うことが多い。残念ながら、聖書にはそのような例がない。一方、英語ではする人と影響を受ける人をはっきり示す。文の言葉の役割は語順によって示されている。だから、読み手は文脈をわからなくても英語の文の内容を難なく理解できる。

両言語の尊敬語は全く違う。日本語の尊敬表現では単語と文法が変わるものがある。決まった単語、構造を使わないといけない。英語の尊敬表現は他の方法で尊敬を示す。どちらにも尊敬表現があるが、日本語のほうが明瞭だ。この違いで推測できることが多いが、間違いのないのは文化と言語はこの点で一致しているということだ。

データ出典

日本聖書刊行会（2003、第3版）「新改訳聖書」いのちのことば社

Biblica, Inc（2011、第4版）「新国際版聖書」いのちのことば社（英訳、ポルトガル語の訳、スペイン語の訳）

参考文献

菊地康人「日本語学習入門 → 助詞「は」と〈情報構造〉」

<http://www.nkc.utokyo.ac.jp/study_info/study_info01_04_j.html>（参照 2018-11-11）